

健康文化

地下鉄は肩凝り、腰痛に効く？  
地下鉄考 ～ロンドンーウイーンーパリー名古屋～

西沢 邦秀

プラスチックコップの中のオールドパー12年の水割が1/3程減った。酔いが少し廻って来たようだ。機長が、現在バルト海上空を飛行中で、成田へ予定より約20分早く到着する旨アナウンスしている。パリのシャルル・ドゴール空港をたってから約1時間45分たった。つい、いましがた、ぼんやりと映画の画面をみているとき、佐々木先生から健康文化へ、何でも良いから何か書くように、と仰せつかったことを思い出した。帰国後のスケジュールを考えると、機内で書いておくに限る。あれこれと考えを巡らしているうちに、今回訪れた都市の地下鉄の話でも書いてみようと思いつき、ノートとシャープを取り出したばかりである。ウイーンでの国際学会へ出かけたのが4月11日だった。乗り継ぎと時差ぼけ解消を兼ねてロンドンで2泊した。帰りはパリ経由とした。帰りの機中の今日の日付けは4月20日、明日名古屋へ着くと4月21日になる。少しずつ、忘れていた元の日常生活の中へ引き戻されつつあるようだ。

さて、これから書き始めようと思ったら、スチュアーデスが夕食の案内と同時に食事を運び始めた。やむを得ない、一時中断だ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

夕食はビーフかフィッシュのいずれかの選択だ。退屈しのぎに、スチュアーデスに「最近話題の狂牛病が心配なのでお聞きしますが、ビーフは日本産ですか？」と、尋ねると、「さー、どうでしょうか、わかりません！」との返事だった。「それでは、フィッシュをお願いします。」という、待っていましたとばかりに、「少し前までは、ビーフが、すごく人気があったんですが、あんなことがあっては、あたりまえですよねー！！」と応じて来た。ちなみに、ロンドンのステーキ屋はガラガラであったが、私はステーキ屋でダックを食べてきた。このダックが実に美味しかった。地下鉄の話に戻ろう。国内、国外を問わず、旅先では極力タクシーに乗らないことにしている。バス、電車、地下鉄を利用

する。その土地の雰囲気をつかみ、なじめるからである。今回もロンドン、ウイーン、パリで地下鉄に乗りまくった。いずれの町でも、一日乗車券買い、朝から晩まで、地図を片手に乗り継いで歩き回った。4月上旬の日本では、夕方6時前後になると暗くなり、一日も終りと言うことになるが、何しろ日本より緯度がかなり高いので、そろそろ少し暗くなってきたかと思うと、もう9時頃になっている。日暮れまで遊んでいると大変である。毎日少なくとも10-20kmは早足で歩いた。二日もこういう生活を送ると、日本で日頃悩まされている腰痛と肩こりが、嘘のように消えてなくなる。人間歩くことが健康にとって如何に大事であるかを実感する。

名古屋の地下鉄と言うより、日本の地下鉄の乗り降りは、都市により差はないものと思っている。切符を主に自動販売機で買い、当り前であるが、切符を使って自動改札口を出入りする。出入り口は別々であるが、近くに設けられている。概ねホームには駅員がいる。

ロンドンの地下鉄の乗り降りは、自動化されており、日本と変わらない。ロンドンでは運賃の均一範囲を幾つかのゾーンに分けてあり、ゾーンの範囲が広く、名古屋の様に小刻みに料金を加算しない。運賃はロンドンの方が安い。切符の自動販売機は、まずゾーンを指定し、コインを入れると、足りない金額が表示される。日本では、投入金額が表示される。また、ホームで駅員を見たことがない。大きい駅では、日本同様改札口付近に何人かの駅員がいる。ホームの天井は、トンネルの中の様に半円形となっている。ホームや通路で生演奏をして、小銭を稼いでいるものがあったり、物貰いも時々出没するが、3年前にロンドンを訪れた時より数は減っていた。

ウイーン地下鉄は、実にあっけらかんとしている。切符は地下鉄の外にある売店で売っている。改札口には、切符に日付けをスタンプする小さプリンタが腰くらいの高さの鉄柱の上に取り付けてあるだけである。改札口付近にはプリンタの柱と同じ高さの柱が1-2本立っているだけで、人間を遮る門や扉に類するものが一切ない。駅員もいない。出入り自由である。切符を持っていようが、いまいがお構いなしである。何ということだ。拍子抜けというか、信じられないというか、呆れてしまった。100%人を信用しているのか、最初から切符の収入を当てにしていけないのか、どちらかであろうと思ったが、町の人に確認することを忘れた。

パリの地下鉄の切符の買い方はロンドンと同じである。乗り降りのうち、乗り方はロンドンと同じだが、降り方が違う。入り口と出口が全く別の場所にある。一度入り口と間違えて出口へ降りて行き、扉が全部閉まっていて、切符売

り場へでないので、戸惑ってしばらく考え込んだことがあった。降り口は自動改札機と外にしか開かない手押し扉とが並んでいることが多かった。出口の自動改札機には、天井に届きそうな背の高い扉がついており、出口からホームへ侵入できない。これに対して手押し扉の方は、切符の回収装置がなく、切符をもったまま外に出られた。ルーブル駅のジャンヌダルクの像のある側のチェイリー公園脇の出口に、侵入禁止の標識があった。意味を良く理解出来ないまま降りて行き、この手押し扉を偶然外側から引いてしまったら、簡単に開いた。中を覗くと、数人が列になって勢いよくこちらに向かって歩いて来た。瞬間的に事態を飲み込めた。慌ててもときた道を引き返したことは言うまでもない。日本紳士としては薩摩の守忠度はしていない。しかし逆侵入は簡単にできることが解った。何故厳重な自動扉と簡単に逆侵入できる手押し扉を併設しているのか解らない。ロンドン、ウイーンと同じく、ホームには駅員がおらず、天井は半円形であった。生演奏、物貰い、物売りはホームと通路にいるが、数はロンドン同様減っていた。電車の中での生演奏が結構多かったし、物貰い、物売りとも稀に出くわした。

3年前にパリに行ったときに、モンマルトルの駅でエスカレータに木製のキャタピラが使われていたことにびっくりして、印象に残っていたので、今回もう一度行って見たがそのままであった。古いものを大事にしているのか、単なるデザインなのか解らない。これも聞いてみることを忘れた。パリの地下鉄には他にも木製のキャタピラを使っている駅があるかもしれないが、気がつかなかった。ロンドンでも、ウイーンでも木製のキャタピラを使ったエスカレータを見たことがない。名古屋にはないことはもちろんである。地下鉄にどうやって、列車を入れたか気になって夜も寝られない、と言う台詞で人気のあった漫才師がいた。夜寝られないほどでないが、木製のキャタピラを使ったエスカレータの事が気になる。どなたかご存じではないだろうか。

(名古屋大学アイソトープ総合センター教授)